

Title	ヒルト教授 支那古代史
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.5 (1909. 6) ,p.663(121)- 668(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新著批評
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090601-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を連れて参りました、愈々敵が来て目の前に來るとモウ體が弱つて、今自分の仇を打つと云ふ氣持もなくなつて、何も言はずに死んで仕舞ふと云ふ芝居で御座います、夫れから後は皆様御存じのイブセンのアイルドダツキ「ハウプトマン」の泥棒の喜劇で御座います、夫れは英吉利の方で「シーブスコメデー」と云ふ名前であり、是れも非常な成功を収めた、其外は殆んど、バーナードショーの紹介に全力を盡くしたと言つて宜い。そこで斯くの如く「コオトシニアター」の事業は千九百〇四年から七年迄僅か四年間に涉つた仕事であり、斯く迄短い時期に斯く迄變化のある色々の芝居、進む芝居を紹介した運動は他國は知らず、英吉利に於ては珍らしいのであります、恐らくは英吉利の人は此「コオトシニアター」の事業に一顧の注意をも拂らつて居らなかつたのであります、獨逸の近頃「カンメルステール」と云ふ方法を立つて進んだ方の芝居があつて「マーテルリンク」のもの杯やつて居る青年の芝居があるさ

うであります、夫れなどは向ふへ行きました人の話を聞くと迎も往來杯でカンメルステールは何處であると言つて聴いても誰も知らぬ、夫れと同じくコオトシニアター杯も「ウーデンボロー」で、英吉利人全體の注意を引かなかつた、併ながら如何に劇壇一般の人の注意をしなかつた、運動でも其運動がどの位眞面目なものであり、どの位の意義のものであつたかと云ふ事を後世にも言ひ傳へて夫れが又外國に如何なる影響を致し、如何に幹を出し枝を出し實を結ぶかと云ふ事は測知る事が出来ない事と思ひますから、斯んなつまらない御話で一般から見るとつまらぬ運動と御考へでは御座いませうけれ共、併し此運動が日本の劇壇に取つては世間から注意され無い運動でも非常な事と思ひますから、自分の參考の爲めに調らべて居ました事を御話しまして諸君の静聽を穢した譯であります。三田文學會に於て

(完)

新著批評

ヒルト教授支那

古代史

田中萃一郎

The Ancient History of China to the End of the Chou Dynasty. F. Hirth 教授著 一九〇八年新約 克ロムビア大學出版部發行

通報の編輯主任シャヴンヌ教授はパーカー教授の諸夏原來と併せて本書を批評せるが、本書の長所は先秦時代數千年の歴史を、各時期に分ちてその特徴を甄別し得たと支那民族と角逐せる塞外民族の之に及ぼせる影響を指摘し得たと、并有形的實用的方面に於ける文明進歩の跡を釋ね得たるとの、三點にありと云ひたるのみにて、細評を試みず。然るに史學雜誌の新著梗概には本書に就

て、傳説時代の諸帝の如き古代支那思想の反影せるものとなすも、黄帝の如き尙ほ現實的のものとし、支那文化の基礎を以て、從來支那學者間に行はれたると同じく、この時代にありとし、堯舜又明に歴史的人物となすが如し、これ我國先輩學者の此等諸帝を以て、唯儒教思想の反影として、史的事實としてとらざるをその説を異にせり……尙ほ氏は商及殷の諸帝が、其の名を干支にとれるは、恐らくはその生年に據れるものなる可しとなせるが如きは趣味ある見解と云ふ可しと評せり。余が本書を一讀するに至れるはこの紹介の言に動かされしが爲にして、而して之を一讀するに及びて更に詳細に之が内容に就て記述するの無益の業にあらざるを感ぜり。本書はヒルト教授がコロムビア大學に招聘せられてより、四學年間一般の學生に向て試みたる通俗的の講義より成れり、第一章は神話的口碑的と題し、黄帝時代の文物はバビロニアの文明の餘波に出でたりとのド・ラクトーペリー教授の所説に對し

では、これド。ギムが一七五八年に佛國學士會院に於て、支那人は埃及人の植民地より發達せるものなりと説けると敢て擇ぶ處なかる可しとて之を斥けり。ヒトホフエンの和蘭を以て支那人種の搖籃となすの説をも疑へり。第二章儒教傳説には堯舜并に夏の事蹟を述べしも、勿論書經の記事を正確なりと信じたるにはあらず、即ち第三章殷代の記事に於て、『此時代に至るまでの支那史籍の信用し難きとに就て、シャワング教授は帝王の模範たる堯舜に關する傳説は權衡の相稱へる點に於て人をして疑を起さしむるものあり、支那最古の典籍たる詩經は之に就て何等言及する處あるなく堯舜の事蹟は周代の風俗制度を表示せりと云へるか、余は全然之に同意するものなり。シャワング曰く「禹が能く成功し得たりと云へる水利的事業は、數世代の久しきに亘りて阻勉之に従事するにあらずれば到底能くし難きの大事業たり、禹貢の記事のうちには、古代地理と大禹の傳説と相混淆されあるを以て、之を辯辨し得可し。堯、舜、禹

は三大神話的幻想にして之が形體を捕捉せんとするも能はず、姐己の愛に溺れたる紂辛と、之を伐ちて新王朝を立てたる周代以前には、眞の事實として認む可きものあるなし。即ち西紀前第十二世紀の終りに至りて初めて信憑するに足る可き歴史を有す云々」と。『説き(五五頁—五六頁)、その文物に就て論ずるに際し、書經はその日常の文物に及するや、益々吾人をして疑惑を起さしむるものあり、余は堯舜大禹以下紂辛に至るまでの帝王宰相が、公私の問題に關して述べたりと云へる、所謂先聖の言なるものは、單に儒教學者の哲學的意見を年紀的に排列し、以て人を瞞着せるものに過ぎざるやを疑ふものなり』と云へり(七六頁)。

元來歴日を示すが爲に用ゐられし者にして、小兒の生ずるやその生日の干號を以て之に命名し、この習慣は商代を通じて行はれしが、殷代諸帝の名は之に太仲小祖等の形容詞を添へしに過ぎず。然るに古銅器に見えたる人名にも之に類似のものあり、而してかゝる命名法はこの前後の時代においては殷代の如く盛に行はれざるより、支那の考古學者は之を以て殷代の製作に係るものなりと目せしなり。(七二頁)。扱その銅器時代は何れの時代より鐵器時代に進みしやと云ふに、ヒルト教授は凡そ西紀前五百年頃なる可しとなし、越絶書卷十一に見えたる記事によりて之を證せり。初め管仲の齊の桓公(西紀前六八五—六四三)に鹽鐵に課税するの利を説くや、一女必有一鍼一刀若其事立、耕者必有一耒一耜一鋤、若其事立、行服連軹者、必有一斤一鋸一錐一鑿、若其事立、不爾而成事者、天下無有と説きしが一言も兵器のみに及せず即ち當時鐵の用は平和的器具にのみ限られ戰爭的武器に及ばざりしものと見ゆ蓋し鑄鐵の工未だ鋭

利精巧なる兵器を造るの域に達せざりしが爲ならん。然るに越絶書の記事に據るに、越王勾踐(西紀四九五—四六五)は純鉤と云へる名劍を有せしが、この名劍は赤堇山の錫と若耶溪の銅とを以て歐冶子と云へる名工の鍛へしものなりと見ゆ、(吳越春秋には越王允常、聘歐冶子作名劍五枚、一曰純鉤云々とあり)而して同書は又歐冶子が楚王の爲に鐵劍を作れるとを記せり。思ふに鐵劍は全く當時にありては珍奇と目されしなる可く、楚王はその鋭利精巧なるに感じて、風胡子と云へるに向て夫劍鐵耳、固能有精神若此乎と問ひしに、風胡子對へて時各有使然、軒轅神農赫胥之時、以石爲兵、斷樹木爲宮室、死而龍藏、夫神聖主使然、至黃帝之時、以玉爲兵、以伐樹木爲宮室、鑿地、夫玉亦神物也、又遇聖主使然、死而龍藏、禹穴之時、以銅爲兵、以鑿伊闕通龍門、決江導河東注於東海、天下通平治爲宮室、豈非聖主之力哉、當此之時、作鐵兵威服三軍、天下聞之、莫敢不服、此亦鐵兵之神、大王有聖德と云へり。茲に風胡子の以玉爲兵

と云へる時代は石鏃石斧等の磨かれたる新石器時代に相當す可くその所説は近世人類學者新研究の結果と能く符合せり。實にこの一刀劍鑑定家風胡子の所説は、儒教的傳説よりも却て能く支那歴史發展の真相を説明せるものにして、舊石器時代の末に當れる黃帝が、採首山之銅鑄三鼎于荆山之陽と云へるが如き、若くば風胡子が銅器時代の初になりとなせる禹が、梁州より貢物として、鐵を得たりと云へるが如きは一の時代錯誤にして、人をして支那上古史に對する疑惑を深うせしむる一因たりと説けり(三三四頁—三三七頁)。

以上はヒルト教授の懷疑的所論の一斑なるが、更にその建說的創見の一例として、北狄の支那文明に及ぼせる影響に關する意見を掲げん。第三章に殷の滅亡を叙せるに際し、司馬遷は至紂死所武王自射之三發而後下車、以輕劍擊之と叙せるが、この輕劍と云へる文字は誤れり、司馬遷のその撰述に際し典據とせる逸周書克殷解には、擊之以輕呂 King-iek とあり、而して輕呂とふ熟字は無意

義なるが故に晋の孔晁注に輕呂劍名と見ゆ、輕呂に代るに輕劍の文字を以てせるは、司馬遷にあらすんば後の校訂者の輕呂の義を解せざるもの所爲ならん。然るに之を以て外國語なりと認むる時は、容易に説明を下し得可し。前漢書匈奴傳に、西紀前四七年、漢の使節車騎都尉韓昌光祿大夫張猛匈奴の呼韓邪單干と盟約を爲すや、俱登匈奴諾水東山刑白馬單干以徑路 King-iek 刀金留犁撓酒、以老上單干所破月氏王頭爲飲器者、共飲血盟とありて、應劭の注に徑路匈奴寶刀也と見ゆ。クラプロート等の説けるが如く匈奴の用語は即ち土耳其語なりしと見る可く、近代の同語にて劍を King-iek と云へるは武王の用ゐたる輕呂と相同じからん。果して然らば西紀前第十二世紀に武王の佩びたる劍は記録の上に殘れる最古の土耳其語にて知られたるなり。且又支那の西伯たりし武王が、匈奴の祖先と何等かの關係を有せしとも、亦推測し得らる可しと見えたり(六五頁—六七頁)。

王母に關し、或は指南車に關し、或は銅鼓に關し讀者を啓發するの議論多しと雖も、今はすべて之を略し、前項の補足として趙と北狄との關係に就ての所論を抄出せんに先づ晋の公子重耳の程に奔るや、趙衰從程、伐廣咎如得二女、程以其少女妻重耳、長女妻趙衰而生盾とあり即ち趙盾の母は北狄の女たるなり、西紀前四二五年治世三十三年にして死せる趙襄子は本名を母郵と云へるが母は翟の婢にして空同氏を娶れり。北狄の支那文物に影響す可きは自然の勢にして、シャヴンヌ教授は趙の世家には、不可思議力を語ると史記の他の諸篇よりも多しと評せり。又戰國策には、及三晋分智氏、趙襄子最怨智伯、而將其頭以爲飲器との逸事を載す、説苑には更に後敗智伯、漆其首爲飲器となせり。その匈奴の祖先の俗たる可きは西紀前一七五年より一六〇年まで君臨せる匈奴の老上單干が、月氏王の頭を以て飲器と爲せりとの前項なる漢書の拔萃によりても察せらる、所なるが、更にリゾイーの羅馬史記には西紀前二一六年

執政官 Lucius Posthumus のガリア流民と戦ひて敗れし時、Boii 民族は其頭を刎ねて殿堂に齎らし、之を淨めたる後黄金もて之を覆ひ、以て祭器酒杯となせりとの記事あり、而してそのBoii民族はドナウ江方面より伊太利に來住せし者なりとの説もあれば、或は匈奴と其種族を等うせるにあらざるか。次に武靈王(西紀前三一九年—二九九年)は又政治上より胡服に更めんとし、隨時制法、因事制禮、法度制令各順其宜、衣服器械各便其用、とて反對論者に當れり、正義は胡服を注して、今時服也、廢除裘裳也と云へり、蓋し胡服の必要は、武靈王の變服騎射以備燕三胡秦韓之邊と云へるにて之を知る可く、即ち王は遂胡服招騎射き、初めて軍隊に騎兵を輸入し、以て戰車によりて戰へる從來の戰術を一變せるなり、左傳の注にも至六國之時始有單騎とあり、是亦以て趙の北狄化せる一證となす可しと見ゆ(二六九頁—二七三頁)。

ヒルト教授が現代支那學者中にありて、一頭地を抜けるものあるは今更事新しく述ぶる迄もなし、

本書は一般學生に向ての講義たるも著者の深奥該博なる學識の一端を洩しあるが故専門家に取ても精讀の價あるや言を俟たず一般讀者も一度本書を繙かば思はず識らず支那上古史研究に就て興味を感ずるに至らん實に本書はこの種の書物のうちにありて上乘なるものなりと云ふ可きなり(田中萃一郎)。

三田學會前號目次

論說	Emil Reich. 氏の史學研究法	田中萃一郎
代理行爲の要件を評す		神戶寅次郎
利潤分配法論		氣賀勘重
講演	運河と海運業	堀光龜
時評	試驗制度と師弟の關係—釋尊降誕會—英獨製艦競争—米國茶稅案否決—日糖重役の拘引—雜誌界の傾向	高橋誠一郎
雜錄	露國文豪アンドレエフ論	昇曙夢
	ルーズベルト氏時代概觀	小倉和市
新著批評	氣賀勘重解説フイリツボヅイ	星野勉三
	ツチ氏經濟政策—堀江歸一著	
財政學	E. H. Parker; Ancient China simplified.	田中萃一郎

廣告

現計報告第一回

寄附金收入 六三〇〇〇
 慶應義塾より補助 一〇〇〇〇
 廣告料收入 二〇〇〇〇
 雜誌賣上代 一〇〇〇〇
 印刷會社仕掛料 四〇〇〇
 原稿料速記料 二〇〇〇
 廣告料支出 三九七〇
 廣告知周旋料 一〇〇〇
 立看板郵便物認可手数料 一〇〇〇
 創立以來發行事務經費一切 一〇〇〇
 創立支走者佐藤氏へ慰勞 一〇〇〇
 差引現金 一〇〇〇
 三田學會雜誌創立以來本日に至るまでの會計收支
 左の如く相違無之候也
 明治四十二年五月十四日
 會計監督

田中萃一郎 印